東京大空襲の炎の中から生還

鈴木安孝　東京都

「九死に一生を得る」という言葉はそう簡単に使う機会などあるはずもありませんが、イタズラ坊主だった私は何回かその機会がありました。その中で最もこの「九死に一生」に近かったことが、昭和20年3月10日の東京大空襲による、死の寸前からの生還です。

この東京江東区周辺へのアメリカ軍空爆による被害は敗戦への始めであり、終わりは広島・長崎の原子爆弾投下にあると考えております。

●我が家が戦車につぶされる

私は昭和5年3月に、現在の京浜急行鮫洲駅の近くで生まれました。日米戦で「勝った、勝った」の頃から敗戦へと歩むにつれ、政府や軍はアメリカの野心を日本各都市の木造家屋の焼失作戦にあるとみて、交通要路、鉄道等の沿線にある各木造家屋からの強制移動を命じました。

今では考えられませんが、我が家のように沿線にある木造家屋は、軍が持ち込んだ戦車により瞬く間に破壊されました。家の周りには取り壊した家屋の材木が山と積まれていました。今でも鮮明に記憶に残る光景の一つですが、皆さんは、これをどう思いますか？　自分の家が、自分の国の軍隊の戦車で瞬く間に壊されることなど、想像できますか？　まるで映画の画面でしか見ることの出来ない光景です。

●東京大空襲に遭った理由

私は品川区の鮫洲に住んでいたのですが、江東区での空爆による被害に遭っています。そのわけを簡単に述べます。

私は小学5年生の頃に習い始めた理科の科目が大好きになり、小学校を終了すると、当時深川区（現在江東区）に化学専門の中等学校があると聞き、入学を希望して実姉の応援を得て鮫洲から遠い深川区千石町にある府立化学工業学校（当時は5年制）の一年に入学しました。自宅から東京駅まで市電（錦糸堀行き）に乗り、永代橋を渡り洲崎・東陽町を経由し、府立化学工業学校前で下車するという通学経路でした。

この学校に入学したために、東京大空襲の炎の中から「九死に一生を得て生還する」体験をしたのです。すでに昭和19年の11月末頃から、時々上空の高いところにB29がやってくるようになっていました。

府立化学工業学校の3月の期末試験のため、通学時間の長さを考慮して、その約一週間を知人宅に泊まらせていただくことになりました。その第一日目が昭和20年3月9日だったのです。

●煙と炎と戦う

夕方、サイレンが連続して鳴り警戒警報から空襲警報に変わり、「房総半島沖合に多数B29を発見」という東部管区情報が鳴り響きましたが、その夜の空襲はこれまでのとは全く違っているように思われました。グーン、グーンというアメリカのB29爆撃機のプロペラの音やガラガラと遠雷のように、またトタン板を叩く豪雨のようにザーッと大音響を伴って焼夷弾が降ってきました。この焼夷弾の落下により浅草方面から深川・江東地区・江戸川地区の木造家屋のほとんどが焼失しました。花火のような火の帯が空から降ってきて、その下がポッと赤くなり火の手が上がりました。日本の飛行機か高射砲が迎え撃ってくれない限り、私達は頑丈な建物か防空壕の中に避難しているほかはありませんでした。

私はあっちこっちから上がる火の海の中、泊まる予定にしていた知人宅からすぐそばの学校に逃げ、担任教師の自室であった校内の理化学研究室に逃げ込みましたが、途中の道は人びとの駆け出す足音や叫び声でいっぱいでした。学校は3階建ての鉄筋でしたが、やはり炎や煙が室内に入り込んできたため、知人の研究室に入れてもらい、そこにあった物理の動態実験用の水槽にスイッチを入れ満水にしたのです。その後停電しましたが、水槽を満水にしたことが生還の要因となりました。

煙と外からの炎によりガラスがバリバリと割

れ、カーテンなどが焼けてしまいましたが、友人とともに水槽の水を回りに散布して、飛んでくる火の粉を防いだり炎を消したり、必死の思いで消火活動をしました。ときどき自分もバケツで頭から水をかぶりましたが、その時の冷たい水が熱せられた肌にしみこんだときの気持ちの良さは忘れられません。

東京の下町を焼き尽くすB 29 の爆音やその機影に、朝まで不安な時を過ごしました。何時間続いたのでしょうか、もう燃えるものは燃え尽くして火の勢いが衰えたときには、ほっとしたものです。

●煙と炎から生き延びるための教訓

この時の私が得た非常に重要な経験を、機会あるごとにお話をさせていただいています。室内に煙が入り込み呼吸することが困難になりましたが、青い煙は室内の石の床の底までは行かないので、私達は床に顔を横につけて呼吸することができました。また、逃げ込んだ部屋では、私どもが室内のカーテンなどを早めに除いて、燃えるものを減らしたり、水槽を満水にしたことで、生命をとりとめることもできたし、建物の延焼も免れました。私と先生、友人とその妹は、「九死に一生を得て」あの炎の中から生還できたのです。

朝になって外を見回すと、近くの室内はほとんど燃えてしまっていました。生き残った人々も火傷を負ったりして、髪はボサボサで真っ黒な顔をして、とても生きているとは思えない様子でした。そういう人達がボーッと、すすけた顔で悄然と焼け跡のあちこちに横たわっていました。

8 時頃、周りは全て焼けてしまい、どこまでも続く焼け野原の道を、所々に燻り残る家々を見ながら、東陽町・洲崎・永代橋・日本橋・新橋と銀座を通り、徒歩で鮫洲の自宅に戻りました。

母は私の姿を見ても何も言えず、亡霊を見るかのように呆然と見つめていましたが、父には「よく助かって帰ってきた」と言われました。同時に麻布で空襲被害に遭った姉家族が逃げ込んできて、お互いの生還を喜んだものでした。

あの燃え盛る火の海から、命からがら逃げ延びて「九死に一生を得た」体験です。よくぞ命があったものだと、後になってつくづく思いました。

戦争というものは、惨めさ、酷さ、悲しみばかりを人の心に刻み込むものです。

（昭和 20 年 3 月 11 日朝日新聞記事より）

★昭和二十年三月十日

敵機の夜間来襲が激化しつつあったことは敵の企図する帝都の夜間大空襲の前兆として既に予期されてゐたことであった

敵はつひに主力を以て帝都を、一部をもつて千葉、宮城、福島、岩手の各県に本格的夜間大空襲を敢行し来った

まづ房総東方海上に出現した敵先導機は、本土に近接するや、少数機を極めて多角的に使用しつつわが電波探知を妨害して単機ごとに各所より最も低いのは千メートル大体三千メートル乃至四千メートルをもつて帝都に侵入し来り帝都市街を盲爆する一方、各十機内外は千葉県をはじめ、宮城、福島、岩手県下に焼夷弾攻撃を行った

帝都各所に火災発生したが、軍官民は不敵な敵の盲爆に一体となつて対処したため、帝都上空を焦した火災も朝の八時頃までにはほとんど鎮火させた（三月十一日朝日新聞）

○大本営発表（昭和二十年三月十日十二時）

本三月十日零時過ヨリ二時四十分ノ間B29約百三十機主力ヲ以テ帝都ニ来襲市街地ヲ盲爆セリ

右盲爆ニヨリ都内各所ニ火災ヲ生ジタルモ宮内省主馬寮ハ二時三十五分其ノ他ハ八時頃迄ニ鎮火セリ

現在迄ニ判明セル戦果次ノ如シ

撃墜　十五機　損害ヲ与ヘタルモノ　約五十機